

開催地名：三重県伊勢市	
開催日時	令和元年 11 月 10 日（日） 10：00 ～ 11：00
開催場所	伊勢市立城田小学校
語り部	菅井 茂 （宮城県仙台市）
参加者	城田地区住民 約 120 名
開催経緯	津波の浸水想定区域外であるためか、地震に対する危機意識が少ないと感じている。防災訓練を定期的実施しているが、マンネリ化を否定できず、参加者は減少傾向にある。そこで、東日本大震災の語り部に体験談や地震への備えについてお話いただき、今後の防災活動に役立てたいと思う。
内容	（１）はじめに 仙台市若林区南材地区は、東日本大震災による津波では被害を受けなかったが、1,700 名を超す避難者が出た。震災当時、私は南材地区町内会連合会副会長であった。本日は避難所運営や震災後の地域防災の取組を紹介したいと思う。 （２）避難所に詰めかける人々 震災後、私は南材木町小学校で避難所開設の準備をしていた。ところが、15 時頃にはすでに「開けろ、開けろ」と外から声がしたので、15 時 10 分過ぎには開けた。20 時の時点で、水と乾パンを全員に配った。そのとき、905 名が避難していることがわかった。避難者数は最終的には 1,200 名になった。仮設トイレを北側にも設置したが、寒くて誰も使用しなかったため、あわてて東側に作り直した。また、自家発電機は 2 基あったが 1 基は作動しなかった。こうしたことも、日頃からのチェックが必要であると反省した。3 月 11 日の夜、避難所運営委員会を立ち上げ、役割を分担し、ボランティアを募った。その結果、若い人が寝ずの番でトイレ番をしてくれるなど、トラブルもなく運営できた。 避難所の起床は 6 時半、朝食が 8 時、夕食が 17 時、昼食の提供は実施しなかった。地区内で倒壊家屋はなく、水が出ないだけだったので、帰宅して食べてくださいと案内した。また、あらかじめライフラインが復旧したら帰ってほしいと伝えてあり、10 日後の 3 月 21 日には全員速やかに帰宅してもらった。 （３）避難所運営がうまくいった要因 私は 3 月 13 日からは八軒中学校の避難所へ行った。こちらには 460 名の避難者がいた。避難所は避難した人たちのホームである。地区の代表者を係に決め、希望や不満を募った。その結果、ラジオ体操をしたり、女性には食事の献立を決めてもらい、調理してもらった。驚いたのは、「自転車がほしい」と言う人がいたことだ。南材地区のいたる所に自転車を譲ってほしいと貼り紙をしたとこ

ろ、15 台集まった。その自転車を皆に自由に使ってもらった。自転車で遠い地域へ行き、ネギなどの野菜をもらってきてくれた人もいた。

避難所運営がスムーズに行われたのには要因があった。まず1つは、平成 17 年から地域で総合防災訓練を実施していたことである。平成 19 年からは避難所となった八軒中学校とも連携し、同校で防災訓練を行った。東日本大震災の2日前にも、同年の防災訓練について打合せをしたばかりで、避難所を開設したらどう動く、ということが頭に入っていた。さらに、地区の昔からの住民とマンション住まいの新住民が、小学校の諸行事を通じて顔見知りになっていたことも大きい。行事というのは40年以上も続く夏祭りや運動会であるが、こうしたイベントは地域の人が出会う良い機会になる。震災後も、「防災訓練」にひと工夫して、様々な世代に防災の重要さを認識してもらうことをテーマに活動を継続している。地道な活動が、ひいては「自助」・「共助」のありかたを見直すきっかけにもなるかと思う。

（４）課題と新たな取組

しかし、課題も明らかになった。災害対策本部に住民の安否確認を報告しない町内会長がいたのだ。以来、震度6以上では必ず報告することとした。また、総合防災訓練をさらに強化することにし、地域が主体となり、各学校と協力して実施することになった。まず自分で自分のやるべきことをし、それからお互い助け合うことが重要である。



開催地より

やはり、以前からの積み重ねが非常に大事で、このようにスムーズな避難所の運営には、司令官のような存在が必要だということも実感した。避難する各町内会や自主組織防災間の連携はすぐに始められると思うので、まずは始められることから始めていければと強く感じた。